

共同研究 ● 「統制」と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ（2012-2015）

本共同研究は、3年目を終えまとめの段階に入っている。本共同研究の目的は、社会主義体制研究において指摘される「統制」、そして、市民社会を前提として議論される公共性概念に着目しながら、東南アジア、とくにミャンマーを核として、政治やイデオロギー上の統治を、ミクロな実践の側から考察することにある。本稿では2014年度の活動状況（4回の研究会開催）を報告した後、今後の共同研究の成果報告に向けて、現在取りくんでいる課題に触れてみたい。

### マイノリティからみた統制と公共性へのアクセス

最初の2回の研究会では、ミャンマーにおける民族、宗教上のマイノリティに対する政治的統制と彼らの公共性へのアクセスの可能性に関する報告が行われた。第1回研究会で田村慶子（北九州大学）は、観音寺等の寺院調査から、寺院内の華人相互の交流、華語教育の実態、緬華文化協会の活動について報告し、さらに家族会による華語家庭教師の雇用と派遣等を明らかにした。こうした事例を通じて、華人がネーウィン政権時代以来の厳しい統制のなかで、国内および中国との複数のネットワークを形成し、華人のトランスナショナルな公共圏（性）にミャンマー華人も結び付けられる可能性があることを示唆した。

一方、特別講師の木村自（当時大阪大学、現人間文化研究機構）はミャンマーの地方都市ミャウンミャにおける、華僑華人の互助組織による「観音庁診療所」とその慈善活動に着目する。同診療所は、貧困層非華人を対象にほぼ無料で医療を提供する。地方政府の受託で運営する養老院も主に貧困層の老人を収容し、華僑華人による結社である「和勝公司」の長を中心に運営されている。すなわち、ミャウンミャの華僑華人は慈善活動を通してコミュニティの福祉向上に努めることで、非華人との間の協働に基づく公共空間を構築していると指摘した。

第2回研究会で生駒美樹（東京外国語大学・大学院生）は



観音寺で行われた楊家の法要の様子（2006年12月、ヤンゴン観音寺、田村慶子撮影）。

シャン州パラウン自治区ナムサン郡の少数民族パラウンによる茶栽培に着目した。従来、この地域は国内でも最高品質の茶産地として有名だったが、現在、中国茶の流入や新興産地の台頭等により、茶産業は不振である。その結果、茶園の所有の有無にかかわらず多くの人がカチン州やシャン州のケシ畑に出稼ぎに出ている。これに対し、自治区政府や茶業者組合は茶業保護活動を行い、パラウン民族武装勢力やローカルNGOがケシ栽培撲滅活動を行っている。茶葉と比して、ケシは経済的利益はもたらすが、禁制品であるだけでなく、コミュニティでの阿片使用等のマイナス面が認識されている。ここでは生産品への「統制」が単に国家の側の回路に留まらない例が示された。

特別講師の山本文子（民博・外来研究員）は都市部ヤンゴンにおける霊媒カルトに着目した。カルトのメンバーの参加経緯を分析すると、入るきっかけは霊媒の能力への評価等より、以前からの霊媒同士の地縁的つながりが重視される傾向がある。換言すれば、地縁的つながりが先にあり、それが霊媒カルトという形態で表出しているとも考えられる。また、霊媒カルト集団を主体として、加入者以外にも開かれた儀礼が開催されており、そこでは加入者、非加入者を問わず、それぞれが願いや期待を共通の宗教的存在に託す。このように霊媒カルト集団による儀礼は、ミャンマーにおける人のつながり方を示すとともに、彼らの願いを意識化し、示す場を提供している。この意味で、霊媒カルトの事例は、ミャンマーにおける人的ネットワークのあり方および宗教的な公共空間を考察するうえでひとつの可能性を示しているといえるだろう。

### セキュリティにおける民営化

経済の自由化、政治の民主化は国家のありよう、国家と社会の関係、社会のありようを大きく変えている。第3回研究会は、セキュリティの分野で進む民営化に着目した報告が



調査村での茶摘みの様子（2012年6月、シャン州パラウン自治区ナムサン郡、生駒美樹撮影）。

行われた。上記の問題意識のもとで、岡本正明（京都大学）は、スハルト権威主義体制から民主化したインドネシア、タン・シュエの独裁体制から新体制へと民主化しつつあるミャンマーにおいて、どのようにセキュリティーの民営化が進んでいるのかを比較検討した。急激な民主化の進んだインドネシアでは、従来国家の役割であったセキュリティーの保全を企業に委託するセキュリティーの民営化が一気に進み、その後、徐々に権力側が制度内に取り込んでいく過程が見られた。それに対して管理された民主化の進むミャンマーでは、セキュリティーの民営化は軍・警察が社会のプライベート領域に浸透する契機となっており、民営化への制度設計は進んでいないと指摘する。

一方、特別講師の菱山宏輔（鹿児島大学）は、急速な都市化を見せるバリ州都デンパサール特別市において、地域社会を基盤とする自警団の動向と、門が設けられ出入りに一定の制限が加わるゲートッド・コミュニティを事例に、統制と公共性の様態を考察した。地方分権化以後のバリ島の自警団は、一面で、バリ島ナショナリズムを強めながら、他方ではツーリズムとの関わりから地域開発に資する活動を行っていた。ゲートッド・コミュニティについては、都市周辺部の宅地造成・土地価格の急騰とともに増加傾向にある一方で、バリ島の地域社会構成および伝統的な家屋敷の門（pamesuan/pemedalan）が担ってきた公共性を一定程度担保する「ゲート空間」の可能性が見いだされたと指摘する。

この2つの報告はセキュリティーという「統制」における民営化が東南アジアでも進展することを指摘したもので、「統制」の主体や枠組みそのものを問い直す、重要な提起を行っている。

#### 研究会の方向性と課題

第4回研究会では、土佐がこれまでの研究会での各報告を踏まえ、とくに報告者によって定義や使用に差異がある公共性概念の再検討を目的として、関連文献のレビューを行い、今後に向けいくつかの課題を述べた。またこれまでの報告における議論の布置を再確認しながら、全員で討論を行った。

今後考察を深めるべき課題として、第1に、ハーバマスは、市民的公共性をいわば公と私の間として想定し、「政府と右翼の監督をうけていた公共性が、論議する私人たちの公衆によって略奪され、公権力に対する批判の圏として確立されるにいたる過程」に着目したといえる（ハーバマス 1994: 72）。ハーバマスはその後、手続き論に関心をずらし、システム、生活世界をコミュニケーション行為から説明しようとするが、ハーバマスのように市民を出発点とするのではなく、コミュニティを含む日常実践の観察を通じて、公共なるものがいかに立ち現れ、広がっていくかの研究はミャンマーをはじめとする東南アジアで有効と考えられる。



民主化後にミャンマーで台頭し始めた警備会社（2014年6月、ヤンゴン、岡本正明撮影）。

第2に、すでによく知られるように、フレイザー（2000）はハーバマスがブルジョワによる唯一の公共性（圏）を想定したことを批判し、同時代にナショナリスト、大衆、エリート女性、黒人、労働者階級等の「競合する多数の対抗公共性」が出現したことを指摘する。今後はこれら複数の対抗公共性の特質や政治的実効性との関係も考慮する必要がある。たとえばフレイザーは、内部での討議実践が意見形

成に加えて決定を含むかによって、その双方を含むものを「強い公共性」、意見形成だけで決定を含まないものを「弱い公共性」と呼んでいる。例えば前者の「強い公共性」が自主管理の制度化という形で拡大していく状況として、職場（工場を含む）の自主管理のほか、危機の際の地域コミュニティといった事例（初年度の伊野報告等）が想定できる。これらは「統制」と合わせて考察する必要がある。

第3に、諸々の政治的統制のゆえに公的な団体が結成できない場合でも、多様な公的アリーナ（討議の場）にアクセスするやり方そのものに注目する必要がある。多数の報告者が東南アジアにおける民族、宗教マイノリティを研究対象としており、そうした人々のネットワーク形成のプロセス、メディアや出版などへのパブリック・アクセスのあり方、ネットワーク内での討議の形成等を追うことには大きな意義がある。

最後に、公／私、公共圏／親密圏といった概念の個別社会における有効性には疑義もあるが、権力に基づいた「統制」が強く働く状況下では、特定テーマの討議が行われるアリーナや集団（あるいはネットワーク）の特徴を分析し、それらがいかにより広い公共なるものに結びつきうるのか、単に対抗的側面だけでなく、再度権力と結びつく側面も含めて考察する問題意識が重要であろう。また、近年「世俗主義」が欧米の一部のモデルに過ぎず、多くの社会で宗教が公共性に埋め込まれていることが指摘されるが、東南アジアも同様である。仏教言説と公共性の関連、さらに、僧侶や精霊信仰の霊媒を核とする宗教ネットワークと公共性との関係をいかにとらえるかの考察も課題である。

#### 【参考文献】

- フレイザー、ナンシー 2000 『中断された正義：「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』 仲正昌樹監訳 御茶の水書房。
- ハーバマス、ユルゲン 1994 『公共性の構造転換：市民社会の一カテゴリーについての探求』（第二版） 細谷真雄・山田正行訳 未来社。

#### とさけいこ

東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。専門分野は文化人類学、ミャンマーの宗教研究。著書に『ビルマのウェイザー信仰』（勁草書房 2000年）。共著に *Champions of Buddhism: Weikza Cults in Contemporary Burma* (Bénédicte Brac de la Perrière, Guillaume Rozenberg and Alicia Turner (eds.), Singapore: National University of Singapore Press, 2014) など。